

---

# 大国の美姫と小国の騎士

東雲よはんそん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大国の美姫と小国の騎士

### 【Nコード】

N07260

### 【作者名】

東雲よはんそん

### 【あらすじ】

なんでこんな事になってしまったの!?

大陸最強と呼ばれる大国グレンツィアの第一王女シャルロット。彼女は小国アルガセルの王子の元に嫁ぐはずだった。

なのになぜ。彼女の夫となる人物は貴族の養子ではあるが、出身は平民の騎士だった。

血筋を重んじる国の王女と高貴とは言えない血筋の騎士。

二人の不器用な夫婦生活のお話。

## 00・開戦のゴング

なんて事なの！

あり得ないわ！！

私は仮にも、大陸最強といわれる大国グレンツィアの第一王女。国同士の繋がりのための政略結婚はしつかりと想定範囲内。

それが我が国にとって取るに足らない小国である事はこの際置いとく。

けれど、どうしても納得いかない事があるのよ！！！！  
なんで。

「……どういたしました？ 私の顔に何か？」

「申し訳ありませんわ。わたくしの夫になる方に直接お会いするのは初めてですから、つい……」

なんでこの男が私の夫！？

こいつ、王子どころか、この国の王族ですらない！！！！

さらに言ってしまうえば、一応貴族の端くれだけど、その血筋は下賤の身だと言っじゃない！！！！

「私も、妻となる方がこうまで美しいと自然と視線が向かってしまいます」

「あら、いやですわ。お世辞なんて必要なくてよ」

なによ、この腹の内を探り合う感じ！！

何なのよ、この男！！！！

「どうぞよろしく。美しい奥さん？」

「おほほ、こちらこそよろしくお願いいたしますわ。旦那様？」

カーン。

私の脳内でゴングが響き渡ったわ。

ええ。

開戦のゴングよ！

全面戦争と行くつもりじゃないの！

## 00・開戦のロンゲ（後書き）

ハイテンションではじめてしまいました。

ちょっとシリアスになる時もあるかもしれませんが、基本はコメディ  
イーっぱく明るく進めていけたらいいなあ、と思います。

## 01：結婚式は上の空

『……婚姻、ですか？』

この話が持ち上がった時ののんきな私をぶん殴ってやりたい！

ああ、なんでこんな事になっているのよ！

私は今、なんでこの男と式を挙げているのかしら。

「汝、ニコラウス・ヴァーグナー。死が二人を別つまで変わらぬ愛を誓いますか？」

「誓います」

私の横で、にこやかに誓う男。

ニコラウス・ヴァーグナー。小国アルガセルの騎士で、王族からの覚えもめでたい有能な男。今は騎士団の一つの隊の副隊長をしているらしい。

けれど、その出身は貧民街の中でもスリや窃盗は当たり前前の最下層の出だ。それを現在の騎士団長に才能を見いだされ、王都へとやってきたらしい。

騎士団長の計らいで貴族の子息しか入れなかった騎士を養成するための学校へ入り、メキメキと頭角を現した。今でこそヴァーグナー家の養子として、一応貴族の体裁はとっているが、それでも実力でここまで駆け上がった異例の存在。

「汝、シャルロット ……」

これは、アルガセルに入国してから今日までの短い期間で私が調べ上げたのよ。

私の旦那様の事をね！

本来私の旦那様になるはずだった王子の事ならある程度下調べしていたけれど。まさかこんな事になるなんて思わないからね！  
超焦ったわよ！

「私の未来の奥さん？……誓ってください」

なによ？

数時間後の未来の旦那様が表情を崩さないままぼそりと呟く。  
ヴェール越しに胡乱な眼を向けた後、前を見れば神父が困ったような顔をしてこちらに微笑みかける。

いつけない。忘れてたわ！

いまは式の最中だった。

不本意すぎて脳みそが理解するのを拒否してしまったみたい！

「誓いますわ」

「では、指輪の交換と誓いのキスを」

明らかにほっとした神父の前で、未来の旦那様がもったいぶった仕草でヴェールを外す。

柄にもなく緊張してきた……。

でも、仕方がないと思わない？ いくら大国の第一王女だって言っても、不本意な相手との結婚だって言っても、結婚式は女の子の憧れだわ。そうでしょう？ 好きな人と永遠の愛を誓うのよ。もしくは政略結婚という名で結ばれた同志とね！

ああ、残念でならないわ。相手がこんな男だなんて。

「これから、末永くよろしくお願いします」

今までのずっと穏やかな声音と穏やかな表情で紳士そのものだった男の声とは明らかに違う響き。

伏せていた瞼をそつと目の前の男に向ける。  
その瞬間を待っていたかのように、ふさがれた。  
何って……唇を。唇で。

いいいいいいああああああ！！

内心の私は大絶叫よ！

だってファーストキスよ！！！！

いやいやいやああああああ。

……。

……。

って結婚といい、キスといい、乙女な発言を繰り返してるけど。  
実際、本当に王子と結婚しても私の気持ち的にはほとんど変化が  
無いのだけだね？ 未来の……いや、誓いのキスしたからもう旦那  
様ね。ニコラウスへの対抗心というか、反抗心というか、な心境  
が同じ境遇同士の連帯感というか親近感に変わる以外は！

ゆっくりと唇が離れる。

ニコラウスは獰猛な猛禽類のような目をして、そのくせ表情は今  
までのにこやかな仮面。けれど、その口元は今にも舌舐めずりをし  
そうに見える。

知らずにふるりと震えた私を彼は目を細めてみた。

「……夫に対してそんなに怯える必要はないと思いますよ」

また。



肉食獣を前にした草食動物はこんな心境なのね。

これで夫婦となったからなのか、ニコラウスの今までつけていた仮面がひとつ剥がれたみたい。

私は仮面をはがさないわよ！ 絶対に負けないんだから！！

そついう気持ちでギツとニコラウスを見た。彼は面白そうな顔でこちらを見てるわ。

負けない、と意気込んだそばからなんとなく負けた気分になって、視線をそらす。

その先には国賓である、私の父。大国グレンツィアの国王と私の弟二人、そして宰相。王妃はいない。

末の弟の第四王子は私が向ける視線に純粹な笑みを向けて見返してくれる。けれども他の三人はずっと冷めた目をして、機械的に手を動かし、周りと同様に拍手を送る。

その様子を見て、私は思い出した。

私の結婚が、祖国ではなんと呼ばれているかを。

『王家の穢れの厄介払い』

自分で思い出したその言葉に少しへこむ。

その直後に、私の腰に手が回り、ゆっくりとけれど有無を言わせない形で私を歩かせる。

その手の相手はもちろんニコラウス。

彼はしっかりと前を見据えて、この会場の出口へと向かっていた。私が物思いにふける間に、式はさっさと進んでしまっていたんだわ。もったいない！ 結婚は女の子の憧れとか自分で言っておきながら、肝心の私が上の空だなんて！！！！

……。

内心で散々ニコラウスとの結婚を嘆いたけれど、本当はちよつぴりだけよかったとも思っているの。

だって、穢れだなんて呼ばれる私がいくら小国といえど、王位継承者の王子と結婚とか、笑っちゃうでしょ？

あ、一応言っておくけど、第一王女で、大国グレンツィアの国王の第一子である事には変わりないのよ？ ただ、私にちよつとした秘密があるだけ。

それに、きつと境遇を嘆く私よりも可哀そうなのはニコラウスだわ。

私の旦那様。

でも、絶対に負けないけどね!!!

何に負けたくないのかももうよくわからないけれど！ 独り相撲な気もしないでもないけど!!!

全面戦争なんだから!!!

## 01：結婚式は上の空（後書き）

ちよこつとだけ修正しました。

ニコロナウスの口調の部分です。敬語に戻してます。

## 02：ヴァーグナー夫人の秘密

とりあえずここに宣言するわ。

初夜なんて、甘さのかけらもなかったし、普通初夜に行われる事が一切なかった事もね！

私、断固として拒否したから。ええ、それはもう断固として。

結婚生活三日目、初夜以降ニコラウスと顔を合わせない生活が続いている。それに対して特に不満はないわ。

でも、なんでいまだに王城の一室を与えられたまんまなのかしら。確かに最初は王子と結婚する予定だったから、疑問もなかったけど、でも騎士と結婚しちゃったんだから、旦那様のお屋敷に行くのが普通じゃないの？

なんて事を紅茶を飲みながら考えた。

王城の一室だけあって、やっぱり豪華。祖国には負けるけど。でも、私はそんなに贅沢に執着があるわけでもないから、正直もっと狭い部屋でも良いし、こんな華奢で扱うのも恐ろしい家具や食器はなくても良い。

ベッドだって、装飾も布団もすごい。このベッドは私一人で使っている。

『絶対、絶対、ぜーったいに嫌ですわ！！』

『なぜですか？』

『だって、わたくしはグレンツィアから嫁いできた、第一王女ですよ！？ なんて王子ではなく、貴方がわたくしの旦那さまなので、すか！』

『そうは言っても、貴女も誓いに同意しました』

『それはそうですが！ でも、絶対にいやですわ！！』

『はい、わかりました。ですが、ベッドはひとつなのでとりあえず

「一緒には眠りましょう？　結婚した夫婦らしく」

貴女はそういう演技すらできませんか？

という挑発するような視線にメラメラと炎が上がってしまったわ。ええ、一緒に眠りましたとも！　このベッドに初夜だけ。もちろん、何事も起こらなかったわ。

そういえば旦那さま、もといニコラウスはあのとき感じた獰猛な印象を再び綺麗にかくしてしまった。まあ、優しい顔して結構色々と言ってくれるけどね。私も猫を被ってるから相手の事は言えないけれど。だけどさ、ちょっと普段と違う部分を見ちゃうと他にはどんな部分があるのか知りたいっていうか……逆にあれつきり隠されるのもなんか不安っていうか。……あー、もー！　気にすんのやめた！！

それよりも。自分で言ったのだけど、初夜で私が吐いたセリフは我ながらすごい。結婚したその日に旦那さまを否定するなんて。それに対して、全く怒らずに大人な対応をしたニコラウスもすごいと思う。

コンコン。

扉をノックする音。

その主を確認しに行く侍女はいない。私が断つたし。祖国からも侍女は連れてこなかったから、まあ、私と一緒に来たがる侍女はいないからね。今、私はこの部屋にひとりきり。

「どちら様？」

「エルヴィンです。お邪魔してもよろしいですか？　ヴァーグナー夫人」

「どつぞ？」

そつと扉を開けて入ってきたのは、この国の第一王子エルヴィン。私の政略結婚相手のはずだった男。

「ご機嫌麗しゆう、夫人……そんなあからさまに嫌そうな顔はしないでください」

何が悲しくて私は元婚約者（と呼べるのかしら、この場合）と顔を合わせなければならぬのかしら。……でも元婚約者の住居に居候してるのは私だったわ。

部屋の中央にある椅子を勧める。

エルヴィン様は勧められるがままに椅子に座り、お茶を出す私を見て苦笑した。

「不機嫌ですわ、エルヴィン様。わたくし、貴方と婚姻を結ぶものとおもってましたもの」

「その節は大変申し訳ありません」

「下手したら国交問題にも繋がりましたのよ？」

ふう、と厭味つたらしくため息を吐いてエルヴィン様の向かいに座ってやった。

エルヴィン様はふ、と意味深な笑いをこぼして。

「……ではなぜ、問題にならなかったのでしょうかね？」

「それは、貴方が知る必要のない事です」

「グレンツィアの穢れ」

爆弾を落とした。

ピクリ、と思わず体が反応した。

## 02：ヴァーグナー夫人の秘密（後書き）

少しだけ修正しました。

ニコラウスの口調についての部分です



### 03：元婚約者と謎の友情らしきもの

グレンツィアの穢れ。

この言葉は私のある秘密をさして、つまり私の事をさしている。

「貴女が事前に婚姻相手を調べるように、僕も事前に相手の事を調べます。王族の婚姻はどうしても政治的なモノが絡みますから」

何回か顔を合わせた事がある程度だったけれど、この王子、侮れないわ。表面上温厚でちょっと鈍そうな体を装っているけど、腐っても王位第一継承者。

ばれないように細心の注意を払ったはずの私の行動はばれていた。なのに、私もそうされていた事には気付かなかった。……予想をしなかったわけじゃないけどさ。

「……そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。別に秘密をばらしたりするつもりはありません。貴女は臣下に嫁いだ事ですし。……実際に僕と結婚するとなったら全く問題にならない事はありませんでしたが、それでも大丈夫でしょう。ニコラウスという前例が示す通り、この国は他国ほど血筋に執着はない」

「……それでも、わたくしの秘密をしつた貴方を完全には信用できませんわ」

かたい表情を崩さない私に、エルヴィン様は貴公子然とした今までの態度とは180度違う笑顔を向けた。そう、にやりという表現がぴったりな。

「ずいぶん面倒な姫君だな。ヴァーグナー夫人」  
「あら、猫つかぶりはもうよろしいの？」

口調も、敬語のそれから砕けたものに変わった。  
ちよつと衝撃を受けたけど、表面には出さない。私だって王族だもの。そういう教育は受けているしね。

「なんで君がニコラウスの出生の秘密を知ったと思ってる？ グレ  
ンツィアにいたままじゃ、絶対に知ることのできなかつた秘密だぞ  
？」

「わたくしが入国した初日に、貴方がわたくしに教えてくださった  
のですわ」

「その通り。国内ではそんなに重要な秘密ではない。だが、我が国  
は小国だ。グレンツィアが穢れと呼ぶ姫君を平気で嫁がせようとす  
るくらいには弱い国家。さらに言えば、他国は血筋をやたらと重ん  
じる国家ばかり。そんな中で他国でも名を知られる程度には実力の  
あるニコラウスの秘密がばれてしまえば、ますます我が国は他国か  
ら舐められる可能性があるだろう？」

その通りだろう。大陸最強とまで呼ばれる私の祖国が最も血筋に  
はうるさいといえる。それに追隨する国家は多い。そういう国の貴  
族は血筋をもつとも重んじる。だから単純な実力のみで出世した人  
間を實力通りに認める事は決してない。

アルガセルのような国家は異色だ。

「婚姻が成立する前の、しかも当初と相手が変わった、その相手の  
最大の秘密であり国家機密とも言える情報を入国初日に貴女に伝え  
た」

「……よろしいですわ。ひとまず貴方を信用します」

私の言葉に、エルヴィン様は満足そうにつなずき、お茶と一緒に出したケーキを優雅な仕草で……。

……。  
わしつと手でつかんで切り分けもせずにかぶりついた。

「貴女もいつまで猫を被っているつもりだ？」

啞然とする私に向かって、ほつぺたにクリームをつけたままエルヴィン様が笑う。

目の前の光景は幻かしら？ 最近疲れがたまってるのね……。

「秘密を知ってるんだ。そのいかにもなお姫様態度、つかれるんじゃないのか？ 実際、俺は好きじゃない。自分の性格がそんなのに向いてないって知ってるからな。王子様態度をする自分に鳥肌が立つんだ」

嫌そうに言ったエルヴィン様に、なんか一人で気を張って隙を見せないようにしていた私がばからしくなってくる。

「じゃあ、お言葉に甘えるわ。正直、わたくし、とか下囁みそうになるのよ。喋り方もなんか語尾が気持ち悪くて気持ち悪くて」

言いながら私もケーキに手を伸ばす。さすがにエルヴィン様みたいな豪快な食べ方はしないけど、決して上品ではない食べ方だ。

「まあ、これからニコラウスをよろしく頼むよ」

「あら。それとこれとは話が別。私の素を知ってるのは素の状態のエルヴィン様だけ。素の貴方の前以外では私は変わる事はないわよ」  
「なら、とりあえずはそれでいい。とりあえず、今は、な」

意味深なエルヴィン様の言葉に挑戦的な笑顔で返してやった。

結婚三日目。

元婚約者？ と秘密を共有してある意味仲良くなったわ。

旦那様よりも先に。

これってどうなの？

## 04：不快指数は約60

エルヴィン様と変な友情のようなものを築いた日の夜。

三日ぶりに旦那様をご帰還あそばせたわ。正直、帰っても帰ってこなくてもどっちでもいいと思ってたけどさ。初日にあんなにはつきり拒絶しちゃったけどさ。でもやっぱり一応結婚してニコラウスは私の夫だし。なんというか、心配してたわけじゃないけどさ、何してたんだろうってというか。ほら、ニコラウスよりも先にエルヴィン様と仲良くなっちゃったし。

……って、私、何に言い訳してるのかしら。

「顔が百面相をしていますよ。奥さん」

ニコラウスが苦笑しながら、ソファにごろりと寝そべる私に近づいた。そこで気付く。お姫様な私だったら、こんな態度で旦那様を迎えたりしないってこと。この国に来て初めて素をさらした反動か、ちよつと気が抜けてたわ。やっちゃった。

「おかえりなさいませ旦那様。はしたない格好で申し訳ありません」

あわてて立ち上がって夜着の裾を整える。さすがに祖国にいた時ほど豪華ではないけど、貴族の娘が着てそうな気品というか金がかかってるといっつか、そういう夜着。結構しわになっちゃったわ。高価な服のしわって、それを取るほうからするとものすごい神経使うのよねー。悪いことしちゃったかも。

「三日間も帰れずにお一人にしてしまつてすみませんでした。……  
実は」

「別にご説明いただかなくても結構ですわ。気にしてませんから。それに、ずうつと一人きり、というわけではございませんでしたし」

ニコラウスが苦笑した。いつもと同じような表情だけど、なんとなく寂しそうに見えたのは私が彼に罪悪感を持つてるから。

ああ、私の馬鹿。実はちよつぴり気になってたくせに。お姫様態度を取ろうとするとこうなっちゃうのよ。仕方がないじゃない。血筋を重んじるお国の第一王女なんですから。

でもそれなりの常識も道徳心も持ち合わせているのよ？ わがままで選民意識？ みたいなのも高い方だけど。

そりゃ相手が変わった当初とかはやつぱり頭に血が上るじゃない？ そうすると色々と暴言も出ちゃったりするものでしょ？ だけどさ、やっぱり三日もたつとだいぶ心も落ち着いてくるし、そうすると今度は自分の暴言に罪悪感が生まれるものなの。

「そうですか。……：そう言えば今日の昼間に殿下がお見えになったそうですね」

「エルヴィン様ですか？」

そうだった。エルヴィン様と仲良くなっちゃったわ。あの人、意外と私と食べ物の趣味も似てるみたい。あるとき食べたケーキって結構好みがかかるのよね。

あら、ニコラウスつたらなんでそんな変な顔してるのかしら？

「式も終わりましたし、私の所用も今日で終わりましたから。明日にでも私の屋敷へ帰りましょう。……：私の奥さん？」

「え、ええ。わかりましたわ、旦那様」

いやだわ、私ったら。王族ともあるうものがニコラウスごときの有無を言わさぬ雰囲気飲まれかけちゃうなんて。気をしっかり持

たないと！

って、ちよつと。

ニコラウス、貴方顔が近いんじゃない？

え。

ちよつ……！！

「……っん、……なっ……いきなり何をなさるのですか！」

「何って、口づけですよ？」

セカンドキスまで奪われたわ！

しかも口づけって。キスって言うよりもちよつとエロっぽく聞こえるわ。やーめーてー！

「おやめください。…いやで」

「嫌とは言わせません」

「んっ」

のしかかるように迫ってきた体に押されて、ソファに押し戻される。

そしてまた唇が触れ合うって……。何これ！？ 私、襲われてる

！？ 貞操の危機ってやつ??

「身体を許さないのは別にかまいません。……けれど、唇は許していただきます。私たちは結婚しているのですから」

私ってば、さっき気合いを入れなおしたばかりなのに、もうニコラウスの作り出す雰囲気呑まれちゃってる。

しかもちよつと腰砕け。やだわあ、もお。しょうがないじゃない。こういう経験は皆無なんだから！

微妙な酸欠と恥ずかしさで思わず涙目。

それを見たニコラウスがそつと身体を引いて離れてくれた。けれど立てないわ！ 腰が砕けてるんですから！！

「ですが、今はいきなりすぎた事を謝りましょう。……奥さん？」

一向に動こうとしない私に不審そうな声がかかる。

うう、白状したくない。キスで腰が砕けたとか！

私が悶絶しているのを見て、ニコラウスが「立てないのですか？」  
といいながら私をいとも簡単に抱き上げた。向かうは寝室。

私はなんとお姫様だつこで運ばれている。

人生初だわ。憧れていたお姫様だつこ！！

実際されるところも恥ずかしくて逃げ出したい気持ちになるものなのね。

いやああーっ、降ろしてええ！

「明日は少し早めに出ましよう。私は汗を流してきます。……ゆっくりお休みください、私の奥さん」

そつとベッドに降ろされて、ニコラウスは寝室を出て行った。

抱きあげられている間は気付かなかったけれど、私、決して体重は軽くないの。自分で言うのもなんだけど、結構いい身体してるから、その分まあ重さもあるわけで。

そこまで考えて赤面した。

さつきまでとは違う意味で。……だって、男の人に抱き上げられるなんて初めてだわ……。

はずかしいいっ！！！！



私はニコラウスが戻るまでずっとただっ広いベッドの上でゴロゴロと悶えて、入浴を終えたニコラウスを不審がらせた。

そして私は気付いてなかった。

私たち夫婦はお互いに、一度も相手の名前を呼んだ事が無い事に。

## 05・豪邸は微妙な空気

豪邸だったわ。

何がつて、我が家の事よ。

事前に情報収集したから、私の旦那様は平民出身の貴族の養子、  
つて事は頭に入ってたのよ。ええ、ばつちりとね。でもつて、私の  
感覚でいくとお貴族さまつて血筋にはべらぼうにつるさいの。こつ  
ちがうんざりするくらい。

だから、貴族の養子なんて形だけだと侮つてたわ。

そりゃあね、祖国の王城には遠く及ばないどころか、この国の王  
城の足元にも及ばないけれど、でも立派な貴族の邸宅だったのよ。

「……家に入りたくないのですか？ 私の奥さんは」

門の前、呆然と屋敷を見上げている私の横でニコラウスが笑いを  
かみ殺すように囁いた。

入るにきまつてるじゃない！ これから私のうちでもあるんだか  
ら！！

ただ少しだけ動揺したのよ！ 落ち着かないのよ！ ちょっと、  
この家、豪華すぎるんじゃないの！？

私、妻として管理できる自信が無いわ。

「嫌ですわ、そんなわけはございません。素敵なお屋敷に見とれて  
しまつて」

おほほほ、なんて笑いながら、私をエスコートするニコラウスに  
続いて屋敷へと入る。

まあ、わかっているとおり決して素敵なお屋敷に見とれたわけではない。ニコラウスはたぶん私が言葉通りの感情を持ってない事はわかっていると思うの。けれど、結婚してから今まで、それを問い詰めるような事はした事が無い。……って言っても、直接顔を合わせている期間はかなり短いのだけれど。

そういうニコラウスの対応を大人だと思っ反面、何とも言えない落ち着かない気持ちにもなる。ニコラウスが私の夫になると知った時、あれほど嫌だと思って怒りも湧いたのに。私はすごく自分勝手に、そして我がままなんだわ。

「ここが私たちの家になります。私はあまり過剰に人を雇う事をしたくない。だから住み込みの侍女や侍従は最低限です」

私を屋敷に招きながらニコラウスが言った。

柔らかな朝の日差しが差し込み、広いフロアを穏やかな雰囲気包む。いくつかの扉と廊下があり、侍女が数人、こちらに必要以上に恐縮したようなお辞儀をして歩き去る。おそらく大広間へと続いているのだろう廊下の入り口付近には、長身の男性が立っていて、目が合うとこれまた恐縮したようにお辞儀をされた。……なんとなく落ち着かないわ。

実際にこの目で見ても、ニコラウスの言うとおり屋敷の大きさの割には働いている人間はかなり少ない。普通の貴族だったら、きっとこれでもかというほど人を雇う。それだけの資産がある事、富の象徴のような豪華な屋敷で自分のプライドを満足させる。貴族とはそういうものだったわ。少なくとも、祖国では。

「構いませんわ。最低限の人数で貴方がお選びになる人ならさぞ優秀な者たちばかりなのでしょう」

「その通りですのでご安心を。さて、私はこれから一度城に戻らねばなりません。本当は私自ら屋敷の中をご案内したかったのですが

……執事のアンバーに任せましょう」

そう言ったニコラウスの背後から、長身の若い男が進み出てきた。廊下の入り口で私に大げさなお辞儀をした人物だ。

「お初にお目にかかります。執事のアンバーでございます。どうぞよろしくお願いいたします。奥方様」

「よろしくお願いしますわ、アンバー」

非常に緊張した様子の執事の様子に、思わず少し笑って挨拶を返した。城に戻るというニコラウスにも挨拶を、とそのままの流れで振り返れば、ニコラウスったら目を細めて、何とも微妙な顔をして私を見る。

え、何なのよ。その眉間に寄った皺は？

って、ちよつと、いきなり腕を引つ張らないで！ ニコラウス、貴方また顔が近い！！

って思っている間にいきなり抱きすくめられて、またもやキスされてしまった。しかも今までとは比べ物にならないほど濃厚で、私に呼吸すらさせてくれない。

「……っは、……」

わずかに唇が離れると思わず荒い呼吸が漏れちゃう。そんな自分が恥ずかしいわ。最近、なんか羞恥心が刺激される事が多すぎる。

涙のにじむ視界の端ではアンバーが顔を真っ赤にして視線を横に逃がしていた。

「……昨日、伝え忘れましたが」

キスを終えても私を離す気はないらしいニコラウスは、しっかりと私を抱きしめたままわずかにかすれた声で囁いた。

「ちよ、その声、耳元で喋るのはやめなさいな！ ソワソワするわ！！」

「侍女をそばに置かないのは感心しません。いくら相手が殿下だからといって、異性と二人きりになるのはいただけませんね。もちろん、この屋敷の中でも……アンバーも、他の侍従も信頼していませんけれど。……アンナ」

最後の名前は、フロアに響くように張りのある声だった。

ニコラウスの口から女性の名前を聞くのは初めてで、私ったらちよっと動揺してしまったのよ。

「はい……」

怯えたように小さな声と、その声音に似合うくらいに蒼白な顔をした、小柄で可愛い侍女が廊下から姿を現した。

「彼女はアンナです。今日から貴女付きの侍女です」

「ア、アンナでございます。よろしくお願いいたします。シャルロット様」

先ほど以上に怯えた様子で挨拶をしたアンナは、それでも私を名前前で呼んだ。もしかしたら、私の名前を誰かに呼ばれたのって、結婚式での神父以来かもしれないわ。今になってようやく、私はニコラウスにすら名前と呼ばれてない事に気がついた。

アンナの事は名前では呼ぶのに。

「……。え、別に深い意味はないわよ？ 単純に結婚したのだから私の事も呼び捨てでいいのに、とは思ったけれど、別に奥さんとか

貴女でも不満はないし！

ニコラウスの腕の中で悶々としてたら、唐突に腕が離れていった。

「すみません。本当に時間がないので、申し訳ありませんが失礼しますね。夜には戻りますので、夕食は共に取りましよう」

先ほどの濃厚なキスや、眉間に皺を寄せていた時とは打って変わって、本当に焦ったような声を出して、ニコラウスは私に返事をさせる暇すら与えず出て行った。

こんなに微妙な状況で！

玄関を背にして、三人の男女が各自微妙な表情で突っ立っている。さすがに私にだってわかるわよ！ アンバーの様子とアンナって、この侍女の様子を見れば。

私はこの屋敷で歓迎されていない。どうやら恐れられているみたい。

……いちばん最初にあれだけ不満なのを態度に出してたから嫌われてるかもなあ、ってというのは頭の片隅にちらつとあったけれど、恐れられるのは想定外。

なんで???

ようやく任務を終えて、名目上奥さんとなった元王女と自宅へ戻りました。

ようやくですよ？ 王女が入国する前からの任務だったから、これこれ三か月くらいは城での生活を余儀なくされていたのです。ようやくだった……のになぜ。

「なんで俺はとんぼ返りで城に戻らなければならないんでしょうか……」  
「それは俺が呼んだから」

エルヴィン様の私室で、仮にも次期国王と顔をつきあわせているにも関わらず、思いつきり不満を表に出したのはそれだけ俺のうっ憤がたまっている証拠だと思って頂きたいものです。普段の俺は何を考えてるかわからない、といわれるほど感情を隠すのが上手いのですから。

対するエルヴィン様は俺の態度などなんのその、語尾にハートでもつきそうなくらい弾んだ声ですね。ついでに顔はニヤついています。……憎たらしい。

「新婚生活はどうだい？ ニコ」

「その呼び方はやめてくださいと言っているでしょう。……新婚生活なんて、貴方が命令した任務のおかげで始っていないも同然です」

ため息をつきたいのをこらえる。

そもそも、シャルロットの元々の婚約者だったはずエルヴィン様

が彼女を俺の元に嫁がせたくせに、そのエルヴィン様が俺を彼女のそばから遠ざけて自分が彼女と仲良くなっている。

正直、このような現状がかなり不満になるのは避けられないでしょう。

「面白い表情だなあ、ニコ。俺は、お前のそういう態度が見れただけで、この選択は間違ってたかったって思える」

前に比べたら最近俺を信頼してたんだろっが。

そう言つて、エルヴィン様は優しさを滲ませるような眼差しでこちらを見た。

「なんなんですか、一体……」

「今のお前らを見てると、昔の俺とお前を思い出すんだよなあ」

今度は一変して爆笑し始めました。……何なんですか、あんた。

けれど、エルヴィン様の言葉に思い当たる節もあります。

この国に輿入れするために入国したシャルロット。まだ彼女と結婚するとは思つてもいなかった俺は、エルヴィン様の背後からその姿を見つめていました。

決して人に弱みを見せないように、ピン、と張りつめた糸が見えるようでした。それでいて、毅然とした、王族にふさわしい寛容さと厳しさを滲ませて。

その姿が、俺には毛を逆立てた猫のように見えていました。……失礼、もうちょっとマシな言い方をすれば、寂しさや孤独を押し隠している、とでも表現しましょうか。

そして、それが騎士となった当初の自分とかぶって見えて、どこか心に引っ掛かりました。はい。その後、エルヴィン様より彼女と結婚するように言われ、彼女の秘密を知り、余計に彼女から目が離せなくなりましたね。



まあ、言ってしまうえば一目ぼれに近いのかもしれませんが。正直、シャルロットに対する愛情はありますが、恋情があるかと言われるば、ある、と言い切る事はできませんが。愛し合う者同士だったら当たり前な欲望も彼女に対しては抱いていません。だからこそ、「身体を許さないのは構いません」というセリフが口から出たわけですが。……当然ながら、男の生理現象と呼ばれるものは存在しますけれどもね。そう言ったモノの処理は……気持ちの伴わないものであるなら、愛情を向ける相手である必要はないと思うのですよ。はい。こうして考えてみると、私の持つ、シャルロットに対する愛情というのは恋愛に絡むというよりは、親愛、親子の情、そういった類のものかもしれませぬえ。

「ところで、シャルロット嬢とは打ち解ける事が出来たのか？」

まだ爆笑を引きずっているらしいエルヴィン様はにやにやと笑いながらテーブルに置かれた紅茶をすすする。

「そういえば、エルヴィン様」

「んー？ なんだよ」

私が改まって彼を呼べば、ものすごく不審そうにこちらを見た。

まあ、その気持ちもわかりますが。私がこれ以上ないくらいにこやかにほほ笑んでいますから。ええ。

怒れる微笑の騎士とはワタクシの事でございます。はい。

「私に任務を与え、妻から遠ざけておいて、貴方はずいぶん私の妻と仲良くなつたそうぞ」

「ああ、おかげさまでね」

「……私は知っているのですよ？ そのために、政務を宰相に押しつけて、護衛の騎士を撒いて、あまつさえ止めようとした女官に色

目を使った事も」

「!?!」

エルヴィン様はブツと紅茶を嘔きだした。王子ともあろう方はしたくないと思いませんか？ ああ、高価な、それは高価な絨毯にエルヴィン様の唾液交じりの紅茶のシミが……。汚いし、一体いくらすると思っっているのでしょうか。我が主ながら、嘆かわしい事です。下々の金銭感覚を理解していただけないとは……。

「っおい、全部聞こえてるぞ!?!」

「おや、申し訳ありません。うっかり心の内がダダ漏れに」

「……お前のそういうところがえげつないというかなんとというか……」

「……」

「お褒めに与かり光栄でございます」

「決して！ 決して、褒めてないからな」

さて、これくらいで勘弁して差し上げましょうか。

正直、シャルロットの口からエルヴィン様の名前が出た時、不快だったのですよ。俺の名前すら呼ぼうとしない彼女が、元婚約者の名前は平気で口にするのです。いや、先ほど申し上げたように、恋情というよりは親愛の情を彼女には感じていますが、それでも俺の奥さんですからね。とりあえず、俺との信頼関係を築くより先にエルヴィン様と仲良くなられちゃたまったもんじゃない！ と思いついて。ほら、男は独占欲が強く、一度自分のモノと定めたら執着が強くなりますし。……この表現はちょっとシャルロットに失礼ですが。

ああ、考え出すとまたあの不快感が。

「……ニコラウス・ヴァーグナー」

「はい」

白いタオルで自身の口元と服（服にまで飛び散っていたのですか。なんて情けない。高価な服だというのに以下略）をぬぐったエルヴィン様は威厳のある声音で俺を呼んだ。……呼んだが、その手に白いタオルが握られているせいで威力は半減しています。

「新たな情報が入った。……お前を呼び戻したのはそのためだ」

「はい、心得ております」

「王都からほど遠くないクレイヴァにある華街に潜伏しているらしい。……いけるか？」

「ご命令を。この国に、貴方に見出されたときから、私の主は貴方一人です」

「……命令だ。暗殺者か間諜か、そのものをできれば生け捕りに。無理なら殺してもかまわない」

「御意」

私はさつと部屋を出た。

早ければ早いほど良いでしょう。残念ながら、一度自宅へ戻る時間はなさそうです。あの微妙な空気の中に置き去りにしてしまったシャルロットが心配です。今度はどのくらい時間がかかるのか。情報は華街に潜伏している、というだけ。そこにいるたくさん人間の中から、ターゲットを探し出さなければ。

できるだけ早く帰ろう。きっと、シャルロットも待っていてくれるでしょう。私の奥さんなのだから。

いつの間にか、外は太陽が沈もうとしている。出るなら、夜の闇にまぎれるのが一番でしょう。

そう思い、馬小屋に向かう。愛馬は今日も毛並みが良い。

「レダ、よろしく願いますね」

またがり、駆け出した。

ちらりと見上げたエルヴィン様の私室のバルコニーには、エルヴィン様が立っていた。

「……………」

何かを言っているが、残念ながら馬がいい感じに駆け出しているので全然聞こえませんでした。エルヴィン様、そこら辺は察してください。

\*\*\*\*\*

「……………」

エルヴィンは小さくなっていくニコラウスの姿を眺めながらため息を吐いた。

聞こえないだろうことはわかっていた。それでも言わずには居られなかった。

「……………お前は妻帯者だ、ニコラウス。無事に戻ってこい」

危険な任務を何度となくニコラウスに任せてきた。それだけの実力があつたし、それを任せるだけの信頼関係もあつたから。

ただ。

ニコラウスは自分の命を大切にしない。

下賤の身として生まれ、幼少期は悪事にも手を染めていたという。

だが、数年後に彼の才能をたまたま見抜いた当時の騎士団長と、彼を気に入ったエルヴィンによって身分を与えられ、頭角を現したニコラウス。その恩を還そうとでもいうように。

「お前を結婚させたのは、シャルロット嬢の秘密だけじゃない。…むしろ秘密なんて些細な事さ」

シャルロットの根本はとても優しく、人としての温かさを持つ人間だ。それをとんでもない猫を飼ってかくしているが。

「帰る場所と、お前を待つ人が必要だと思ったからだ」

ニコラウスは、もう自分の命を投げ出すような事はしないだろう。きっと、早く帰ろうとして、より安全な作戦を練るに違いない。

「俺ってば結構な策士だなあ」

自画自賛してにやにやと笑うエルヴィンを食器を片づけに来た女官が気持ち悪そうに眺めていた。

そして、口を開いた。

「エルヴィン、この絨毯のシミは何？」

ギョツとして振り返れば、女官だと思っていた女は。

「ゲ、姉ちゃん！？」

「その呼び方はおやめなさい、と何度言ったらわかるのかしら！？どこでだれが聞いているのかわからないのよ！？」

なんと女官の服装をした姉だった。

その後、ひたすら説教をする姉の声は数時間も続いた。  
姉に頭の上がない弟に救いの手、もとい姉の旦那が仲裁に入る  
のはもう少し後になる。

05・5：高価な絨毯にシミ（後書き）

なんか長くなってしまいました。  
更新が遅れ気味で申し訳ありません。

## 06・旦那様からの手紙

ねえ、どうなっているのかしら？

きつと誰にもわからないかもしれないわ。ええ。それはわかってる。わかるとしたら、きつとご当人だけね。

けれど、自問せずにはいられないわけなのよ。

ねえ、どうなっているのかしら？

「……」

ヴァーグナー邸へと居を移して一日たったわ。今は午後。正確には一日と約4時間つてところかしら。昨日ニコラウスが去った後、あの微妙な空気の中で最初に動き出したのは意外にも一番怯えた感じを垂れ流しにしていたアンナだったのよ。

フルフルと震える子羊みたいな声と態度で『お、お部屋へご案内しししみやっすううう』って何回下嚙んだのかしらってちよつと心配しちゃうような、いつそ笑いを狙ってるのかって言うくらいに嚙みっぷりを披露してくれたわ。あの空気の中、猫かぶり状態では全くもって笑えないけど、素の私なら彼女の背中をたたきながらの大爆笑よ。

あら、話がずれたわ。

そう、夫婦の寝室ってやつに案内されて、とりあえず今現在までそこから出てないの。

私がヴァーグナーになってから、5日目の午後。新婚夫婦、という言葉がこれでもかというくらいお似合いな時期ね。

……ニコラウスがいないんだけど。

昨日、私をあんな空気の中に置き去りにしてくださった旦那様、帰ってこないんですけど。



「ねえ、どうなっているのかしら？」

心の声が言葉として出てきちゃったわ。

でも部屋に一人だからむなしいわ。何なのかしら。新婚夫婦ってこんなにもお互いに個人プレーみたいな感じなの？

「シ……シャルロット様っ」

意を決したように気合いの入った声だわ。私、自分の名前をこんなに意気込んで呼ばれたのってはじめてよ。

「なあに？ そんなに大声出さなくっても聞こえるわよ」

だからもうちょっと落ち着きを持ちなさいな。

そんなつもりで言ったんだけど、あの侍女ったら。見る見るうちに目に涙をためて部屋を飛び出して行ったわ。

……え、これって私のせい？

そんなに強い口調じゃないし。ってゆうか、いつの間にかこの部屋にいたのよ。

「奥さま、あまりご自身の侍女をいじめて下さいませんように」

苦笑しながら入ってきたのは執事のアンバー。

ちよっと、ノックの音が聞こえなかったんだけど。

ってよく見たら正確には室内までは入ってない。部屋を飛び出したアンリが盛大に開けっ放しにしてくれた扉の横、困ったような笑顔で銀の盆を持っていた。

アンナ、扉くらいは閉めましょうよ。侍女としての最低限のマナーの一つじゃないかしら。いや、侍女じゃなくても中に人がいるの

に扉を開けっ放しにするのはマナー違反だわよ！

でもほら。私って結構寛大だから。許しちゃうけどさ。……許しているのかしら？

「いじめてなんていませんわ。……でも、そうね。わたくしにも落ち度があったのかもしれないわね。気をつけます」

喋ってる内容は反省してるけど、私の口調は棒読みに近いわ。子供っぽいけど、なんとなくふてくされた気分になるんだもの。

アンバーはしょうがないな、とでもいうような微苦笑で室内に入ってきた。その様子は、昨日のぎこちなさというか緊張感？ がウソみたいに、アンバーは私に対して自然体に近いようなりラックスぶりを発揮している。……仕事だからリラックスという表現はおかしいかもしれないけれど、言いたい事は伝わるでしょう？

「アンナは緊張しているだけなのです。本来はとても有能で気のきく、できた侍女ですから。なじむまで、少しばかりお心を広くお持ちいただければと」

「ええ、もちろんですわ。急な縁談だった事は確かですし、心の整理もつかぬまま仕え始めたのであれば仕方ありませんわ」

「ありがとうございます」

「……ところで、その盆の上の手紙は？」

さつきからずうっと気になっていたのよ！ アンバーの持ってきた手紙に。私のところに持ってくるのだから、私宛か、もしくは屋敷の主人が見聞しなければならぬ書類に関してか、どちらかだと思っのよ。でも私に屋敷の主人ニコラスのことの代理はまだ無理。急な事だったし、この地域の状況なんてほとんどわからないもの。

つまり、手紙は私宛に書かれたものってことよね？

「あ、そうでした。こちらをお届けにあがったんですよ。奥さま。旦那様からです。先ほど早馬で届けられました」

ニコラウスから。

結婚して5日目。はつきり言って全く結婚した実感もわかないよ  
うな、夫婦での生活すら始つてない状態。そんな中、初めて旦那さ  
まからの手紙が届いたわ。

アンバーから受け取った手紙は、とても上等な紙が使われていて、  
いくら平民出身でも、今はしっかりとした身分を持つお貴族様なん  
だという事をうかがわせる。

そつと中身を開く。

「……」

手紙を持ったまま、微動だにしくなつた私に、不思議に思つた  
らしいアンバーが無遠慮にも横から手紙を覗きこんだ。……アンバ  
ー、貴方も執事として以前に他人のプライバシーを侵害するなんて  
マナーが以下略。

とりあえず、初めての旦那さまからの手紙。

甘い言葉を期待するほどのものなんて私たちの間にはないけれど、  
それでも、そこそこ長さのある文章に、挨拶とか、私の心配をする  
言葉とか、そちらの近況？ とかがあると思わない？ 私は思った  
わけよ。

封筒から出てきたこれまた上等な便箋。

その中心に書かれた文。

『すみません、奥さん。急な任務でしばらく帰れません』

これだけ。

え、ねえ、これだけ!?

しかも字がめちゃくちゃ走り書きで乱れに乱れているわ。結婚式の時の署名とは比べ物にならないくらい。ってゆづか、署名すらないんですけど!

ちよっと、夫婦としての二人の生活、いつになったら始まるの!?

## 06・旦那様からの手紙（後書き）

更新が本当に遅くなってしまつてすみません。

一応確認したのですが、誤字脱字がありそうな気配がしますので、後日ひっそりと修正します。何かおかしなところ等ありましたら申し訳ありませんが教えて頂ければと思います。

こんな更新頻度乱れまくりな作品を読んで頂いている方、お気に入り登録して下さった方、本当にありがとうございます。とても励みになります。

## 07：パーティーへご招待

私に与えられた部屋、私に与えられたテーブル、私に与えられた侍女。

初日から私に怯えまくっていたアンナったら、すっかりと私に慣れたみたい。落ち着きを取り戻して当初よりは多少マシな動きになったし。

その彼女は今、私のお茶の準備をしている。

聞いたところ、ここに努めている人たちの中に生粋の貴族は一人もないのですって。だから、元王族っていう肩書に高圧的で高飛車な態度を連想して、それで怯えてみたい。私はそんなことしないけど、そういう王族は確かに存在するからね。

「ひよあつ!?!」

アンナは奇声を発しながら、アツアツの紅茶が入ったティーカップをひっくり返し

そうになって、上手い具合にテーブル

へと着地させた。紅茶を一滴もこぼさずに。

絶対に曲芸師になれると思うのよね。

「お待たせしました。紅茶でございます」

やりきった! とでも言いたげにキラキラと瞳を輝かせて紅茶を差し出すアンナ。

なんかもう、何も言う気もおきないわ。

穏やかな雰囲気をもと屋敷の中で、のんびりとお茶を飲む。そして、気付いた。

「慣れって恐ろしいわ」

「どうなさいました？」

「いいえ、なんでもないので」

すっかりとこの環境に慣れていたけど、ちょっとおかしいんじゃないかしら？

ニコラウスからしばらく戻れないという内容のメモみたいな手紙をもらったのは一週間前。

つまり。

あれから一週間、旦那様が不在の状態、旦那様の屋敷（正確に言えば結婚はしてるから私の屋敷でもあるんだけど）で一人で過ごす私。しかもすっかりその状態に慣れていて、旦那様の存在すら忘却の彼方に飛んでいきそうな事実。

……これは忌々しき問題ってやつなんじゃないの？

「ご機嫌麗しゆう、ヴァーグナー夫人！」

ばーん！

と激しい音を立てて扉が開いた。そしてずかずかと無遠慮に、何の許可もなく私の元まで歩み寄る男。開いた扉の横では、アンバーがげんなりと、それはもうげんなりとした表情で私を見ている。

その瞳は口よりも雄弁に語っていた。  
手に負えませんでした、と。

「……ずいぶんと唐突でございますね？ 王子ともあるう方が」

どことなくツンケンした口調になるのはしょうがないでしょう？  
だって、いくらこの国の王子でも一応貴族の邸宅に しかも夫が不在な状態の 行くのなら、前もつての連絡とそれ相応の礼儀が必要だと思わない？

「これは手厳しい。ですが、僕とニコラウスは主従以上の親密さと信頼を築いているから、この程度の事なら笑って許してくれる」

……。

ちらりとアンバーを見れば、ものすごく引きつった笑いをしていました。

後から聞いた事だけれど、もしここにニコラウスがいれば、笑って鉄拳が下っていただろう、とアンバーが思っていた事は殿下には内緒の方向で。

「……ごめんなさい。アンリとアンバー、少し席をはずしてくれるかしら?」

よくわからない理屈は置いて、突然乗り込んでくるからには何か重要な話題なのだわ。

そんな私の親切心を無駄にするかのように、ヘラヘラと笑いながら「別にいてもかまわないのに」とかほざいている。ちょっと黙ってなさい!

そして、アンバーとアンナは躊躇してる。まあ、気持ちはわかるけれど。まだほとんど一緒に過ごしていない夫婦。不在の屋敷の主人。奥方と元婚約者の組み合わせ。不安要素がてんこ盛りね。

「大丈夫よ。旦那さまと殿下は主従以上の親密さと信頼関係を築いているのでしょうか?」

「……かしこまりました」

「何かありましたら、ほんの些細なことでもかまいませんので、必ず、かならずにその呼び鈴を鳴らして下さいね!」

無理やり納得した様子を見せるアンバーと、ものすごく忠告紛いな事を言ったアンナ。……この屋敷に来た当初はどうなる事かと



思ったけど、私って周りの人間に恵まれているのかもしれないわ。  
二人が出ていくのを見送って、いつの間にかソファに優雅に座っ  
ているエルヴィン様に向き直る。

「で、何なのよ？」

「本当に大した内容じゃない。ただ、城でのパーティーが開かれる  
から、俺直々に招待に来ただけ」

手紙で十分よ！

でも口には出さないわ。仮にも相手は殿下だから。

「君ら夫婦のお披露目も兼ねているからね、申し訳ないが、拒否権  
は無い」

「構わないけど、それは旦那様に言ってくださいな。貴方の命令だ  
か知らないけれど、仕事でちつとも帰ってこないんだから」

「ニコラウスには俺から伝えてあるから心配はない。で、パーティ  
ーの事で忠告に来たんだよ」

そう言ったエルヴィン様の顔が、意外にも真剣だから、私も自然  
と姿勢を正す。

「パーティーの最中、当然ながら俺には護衛がつくが、お前らにも  
護衛の騎士をつけることになる。……正確にはニコラウスに、とい  
うよりはお前にだ、ヴァーグナー夫人」

「まあ、ある程度のそういった窮屈さには慣れっただけど」

「基本的に一人になるな。それからできる限り護衛の騎士、という  
かニコラウスから離れるな」

「……その理由は？」

「教えない」

べつつにいいですけどー。何よ、そんなものっそい何かがある、  
って言ってるようなもんじゃない。大体、私に護衛をつけるんだか  
ら私にも関係あるはずの事なのに！！

「話はそれだけです。では、突然失礼しました。夫人、パーティー  
で美しく着飾った貴女にお会いできるのが楽しみですよ」

そう言っておもむろに私の手を取り、唇を寄せた。そうして笑っ  
て部屋を出ていく。

こつこつ敬意を込めたキスは慣れっこだから、眉ひとつだつて動  
かす事はないけれど。何のためにそんな事をしたのか全くわかん  
ない。私たちの間にそんなものなんて必要ないじゃない。猫かぶりす  
らしてないんだから。

実はそのキスシーンをアンバーとアンナが見ていたらしいのよね。  
で、エルヴィン様ってば二人に意味深な笑みを残して去っていつた  
らしいのよ。

そのせいでしばらく二人からすつこい不審な眼で見られてたわ。  
勘弁して！

07:パーティーへご招待(後書き)

大変お待たせして申し訳ありません 汗

## 08・香水は波乱の香り

パーティーへの誘いは唐突だったけれど、知らされた日時はもつと唐突だった。

なんと五日後。とりあえず無謀よね。

アンバーも侍女たちも、平然としているもんだから私だけが焦るわけにもいかずには進み……。

「どうすんのよ?」

あつという間に当日だわ。私って馬鹿なのかも。

一応ドレスとかはあるけれど、色々準備があるものじゃないの? そもそも、私たちのお披露目も兼ねているというのなら、主役になる私が直前まで知らせれないってありなの!?

「心配ありません! 万事ぬかりなく、奥さまに感づかれる事なきようにひっそりと準備は進めておりました故に、確かに唐突ではありませんが、対応できないわけでもありませんよ」

そう言ったのはアンバー。そしてその言葉通り、完璧とは言えなけれど、ほぼ完璧(ほぼよ、あくまでも)に準備は整っていた。

「足りないところは、奥さまの美しさをより引き立たせる美容とメイク、ヘアセットで補えます!!!」

そう意気込むのはアンナを中心とする、どこか殺気だったように目をぎらぎらさせた侍女数名。

なんとなく意図はわかるけれどもしり込みしちゃう。……だって怖いよ！ 何なのよ、あの気迫

！  
完全に気迫負けしている私は、侍女たちの勢いに押されるがまま風呂に放り込まれて全身をこれでもかと磨かれて、今度は鏡の自分とにらめっこ。ドレスはこれ、髪型はメイクは装飾は。あーでもないこーでもないと着せ替え状態。

（これは確実に準備段階で私の体力はゼロになるわそうにきまってる！）

そんな私の心境なんかお構いなしで、いつの間にか鏡の前には結婚式の時顔負けに作りこまれた私が微妙な笑顔で突っ立っていた。自分で言うのはむなしいけれど、結構な化けっぶりなのよ。

コルセットで締め付けられた身体と重たいドレスをまとい、げんなりとしている私を前に侍女たちはご満悦。

「完璧ですわ」「美しいですわ」とか口々に呟きながら押されるように連れ出されて、慇懃に頭を下げるアンバーの横を素通りし、休む間もなく迎えの馬車に乗せられた。

しかし、しかしよ。

本来なら私をしっかりとエスコートするはずの旦那様が不在なのよ。何？ 何なのこの状況。てつきり一緒に行くものと思ってたのよ、最初は。

「なんで旦那様はいないのかしら？」

「王太子殿下より、ニコラウス様は直接会場に向かうとのこと連絡がありました……」

「そうなの。……なんとなくわかっていたわ」

ちよつとがっかりした気がするのは気のせいよ。コルセットが急

にきつくなつたの。きつと。

パーティーとか舞踏会つて、女にとっては戦場なんだから。気をしっかりと持たないと。

コルセットとドレスは鎧、アクセサリや化粧品は剣。

祖国にいたころから慣れ親しんだ緊張感。今回は結婚後初めての公式の場になる。

ひっそりと、私は覚悟を固めた。

\*\*\*\*\*

なぜかアンナにエスコートされながら入城する。会場へは行かず、エルヴィン様の私室に通されて、疑問に思っていると、エルヴィン様と一緒にニコラウスが入ってきた。

「お久しぶりです。奥さん、一人にしてみましたすみません」

「……お仕事ですもの。仕方がありませんわ」

そつと笑った。

久しぶりに見るニコラウスは騎士の格好ではなく、貴族としてエルヴィン様の側近としてふさわしい格好で、私の完全武装した姿にぴつたりと似合っている。……こうしてみると、旦那様は結構整った顔をしている事がわかる。王子様っぽくはないけど、端正な、無骨な騎士、という感じがしら。私はかっこいいと思うわ。

けれど、そのかっこいい顔には隠しきれない疲労が見えた。

(きつと、仕事が大変なんだわ……)

「よし、そろそろ行くこうか」

ぼんやりと旦那様を見ている私に、ちらりと目配せをしたエルヴイン様が不自然なほど明るい声を出して歩き出した。エスコートしようとニコラウスが差し出した手にそっと私も手を重ねる。自然と二人の距離が縮まり。

「……会いたかった……」

そっと、私にしか聞こえない、というか私に聞かせるつもりもなかったかのような小さな囁き。そしてふわりと香る。そこで私は顔をしかめた。だつて。

「……私も会いたかったですわよ？　だ・ん・な・さ・ま？」  
「……！？」

私の声には隠しきれない不快感がにじみ出てしまったわ。……鉄壁を誇るポーカーフェイス（むしろポーカーフェイス？）が初めて崩れ去ってしまったわ。自分の旦那様ごときのせい！  
突然不機嫌になった私に、ニコラウスってばちよつと動揺してるわ。けど理由がわかってない。

理由？

だつてね！

香水が香ったのよ。いや、それはべつにいいの。身だしなみで男性だつてついたりするわ。

問題なのは。

それが女物、しかも娼婦が好んで使うような、あまつたるーい香り！！！！

旦那様、あなた、娼館に行ったのね！？





## 08・香水は波乱の香り（後書き）

ちょっと見直ししきれっていない部分がありますが、今日を逃すと恐らく今月中の更新は厳しそうなので、無理やり……中途半端で申し訳ありません。

一話目からちよつとずつ文章に修正も加えたので、最初から見直しもしていく予定です。

もしかしたら年内最後の更新かもです。皆さま、よいお年をお迎えください。

それから、最近お気に入り登録をしてくださる方が増えているようで……すごく嬉しいです。更新は遅めで申し訳ないですが、今後もよろしく願います。

## 09：ダンスフロアの薔薇

会場に入室する前にちよつとしたことが  
香水の事よ。もちろん  
あつたけれども、とりあえず表面上はにこやかかつ  
和やかにパーティーは進んでいる。

椅子に座る国王夫妻と王子たちへ挨拶、もちろんその中にエルヴイン様もいる。その後、この国の重鎮たちや招待されたお貴族さまたちへ挨拶に回る。……というよりもドンドンと周りが挨拶にやってくる。まあ、今夜の主役だし。私の祖国とこの国の力量差とも関係しているのかもしれないけどさ。尻尾を振りに来る、犬っぽいより狐と狸よね。おこぼれにあずかるうとか長いものには巻かれるみたいなの。

それと、気になっていたのがその狐と狸たちの視線。

「おめでとございます」

「美しい奥方ですな。うらやましいですよ」

「流石は我が国の有名人」

表面上はお祝いの言葉。声音も表情も二人の幸せを願っているように見える。

けれど、その目は。

目は口ほどにものをいう。これは的を射た言葉だをつくづく思うのよ。彼らの視線は時々、舐めるようにニコラウスを見る。そして忌々しいというように、恐ろしいものを見るように、穢らしいとでもいうように目を細める。

ニコラウスは確かに有名で、認められてはいるけれど彼の立つ世界では決して好意的にみられていない事がわかる。

平民達にとってはヒーローなのにな。裕福な生活に慣れ切ったお

貴族サマには邪魔な存在なのよ。

どの国にもある事。身分の差はたやすく人を高慢にする。軽蔑するよ。うな視線を簡単に人に向ける事が出来る。

その様子に私は眉間にしわを寄せたくなるの。寄せないけれど。感情は綺麗にかくして、表面上はにこやかに。これは腹の探り合いが多い政治の世界や貴族同士のつながりとかには大切なスキル。

「ありがとうございます。皆様に祝ってもらえるなんて私には光栄なことですよ」

相手の自尊心を多少は満足させるだろう言葉。

ニコラウスは絶対に彼らの視線の意味に気付いている。気付いているのに気付かないふりをして、彼らのつまらない話ににこやかに相槌を打つ。

私の旦那様はこういう世界にたった一人で立っていたのね。ものすごく不本意だけど、やり切れないようなおなかにたまるような嫌な気持ちになった。

「気にしなくていいのです。彼らの言葉に私や貴女が傷つくほどの力などない」

腰を引き寄せられた。こめかみにニコラウスの唇。私にだけ聞こえるような小さな囁き。低俗な周りの男たちにバカッブルぶりを見せつけるように。

けれど、それは私の沈んだ気持ちを察したニコラウスの心遣い。不覚だったし、これまた不本意だけれど、ちょっと気持ちが浮上した。私ってばお手軽な女。

そつとニコラウスを見上げた。

気付いた彼は優しい微笑みで私をみかえす。

私も笑みを浮かべようとした時に、ちらりと真っ赤なドレスの後

る姿が視界に入った。色とりどりの衣装をまとう貴婦人やご令嬢たち。その中でも、そのドレスは際立っていた。

私の視線に気がついたのか、ちらりとその女性が振り返る。

「っ!？」

息をのんだ。

「? どうしました? 私の奥さん？」

ニコラウスの不審そうな声にも答えられない。

彼女の唇がゆっくりと動く。

音楽が流れる。

フロアにあふれる男女が踊り始めた。

ニコラウスが背後を自身の背後を振り返った。私の腰に添えていた手が離れて、いつでも隠し持った武器が取れるように身構える。

真っ赤なドレスは人ごみに消えていた。

「本当にどうしたのですか？」

「……申し訳ありませんわ。ちょっと、人の多さに酔ったみたいで」

信じない事はわかってはいたけれど、適当な嘘をついてしまった。

不審そうな顔を隠してはいなかったが、周りの人々から話しかけられてしぶしぶと彼らに向き直る。ニコラウスがこの場から離れられなくなったすきにそっとダンスフロアへ向かった。

彼女と話がしたい。

『お久しぶりです』

私は彼女を知っている。

グレンツィアの王妃の侍女。

私をもっとも憎く思っている女性の、腹心の部下。

## 09：ダンスフロアの薔薇（後書き）

今更ですが、新年最初の更新です。

明けましておめでとございませう。今年もどうぞ美姫と騎士をよろしく願ひします。

話の流れがちよつと不穩な方向なので、次話を早めにアップできるように頑張ります！

## 10：血統書の汚れ

今でも覚えてる。

色街、花街、言い方は色々ある。淀んでいながら、濃厚な甘さを含んだ空気を持つ、独特な俗世から隔離された世界。

母親は没落貴族だった。

一時は国王の正妃候補にまで上がるような美しさと、そこそこの位を持つ貴族の令嬢だったらしい。

だけど、そんなものは長くなると続かない。

私は原因を知らないけれど母親は娼婦へとその身を落とし、散り散りになった一族なんて行方も分からない。

国王は、娼婦となった母親に客として会いに行っていた。

私が九歳になって少し経った頃、母親は病気にかかりあっけなく死んだ。当時、私は娼館の下働きをしていて、このまま娼婦になるんだろう、と幼いながらに全てを諦めていた。

そんな私を拾い上げたのが、私の父。今のグレンツィアの国王。城へと招かれた。正式な王女として。国王の実子として。

王妃や側室が生んだ四人の王子たちの反応は様々で、唯一私より年下だった末の王子だけが私に対して友好的。

側室は私を蔑むように睨んでいた。

王妃は冷静だった。誰よりも。そして、私に対しても平等だった。その腹の内でもた事もない私の母への嫉妬と私そのものへの憎悪の念を育てながら。

私が十五になった頃には、すっかりと母親の美貌を受け継いでいて、父は私に対して奇妙な感情を見せるようになった。

娘として愛おしく思う反面、私の中に母親を想い浮かべてはまるで異性を見るかのように。かと思えば、自分を誘惑する悪い女、と

私を憎み。それでも母親の容姿を色濃く受け継ぎ、その存在を思い起こさせるただ一人の人間を憎みきれない。

王妃は私への憎悪を隠さなくなった。

\*\*\*\*\*

「お久しぶりでございます。シャルロット様」

城の中庭。薔薇が植えられ、それが庭を迷路にしている。普段は恋を求める男女の運命的な出会いを演出しているそれが、今は私達二人を覆い隠す。

「我が国の穢れでありながら、結構なことでございます。……エルヴィン殿下ではないにしろ、国内外にその名をとどろかせるほどの騎士殿に嫁がれたのですから」

不思議だと思わない？

私の母は、貴族の令嬢で血筋では穢れなんて一点もなかった。なのに、娼婦に身を落としたその瞬間から、その血筋は穢れと呼ばれる。流れているその血に変わりはありません。

所詮、私たちは肩書の上に生きているのよね。肩書が美しくなくなれば、その血に価値は無くなるの。

肩書きが血統書となってその身の高貴さを保証する。

「そうね、私にはもったいないくらいの方よ」

そう言って、自分を卑下する私の思考はきつと根底からグレンツ



イアの思考に染まっているわ。王の娘という肩書に合わせてふるまう一方で、娼婦の娘という肩書に自嘲する。なんて矛盾した存在なんだろう。

「その通りでございます。そして、我が主は申し訳なく思い、同情しているのです。貴女様のような方を妻に迎えなければならなかった方を」

侍女は哀しそうな笑みを浮かべた。

決して言葉には出さない。けれど彼女が思っている事はわかる。

本当は国王には歪んだ愛憎を抱く私を一生城から出すつもりがなかった。それは王妃の心をかき乱した。

今回の婚姻は王妃の陰謀も少なからず含まれているのでしよう。

「貴女様はグレンツィアから遠く離れたにも関わらず、いまだに我が主の心を煩わせているのです」

もついででしょう？

侍女は涙を浮かべていた。あの王妃の何がここまで彼女をひきつけたのかは知らないけれど、彼女にとって、王妃は自分が手を汚しても守りたい存在なのね。

うらやましいと純粹に思う。私には、ここまで私を大切に思ってくれる人などいないから。

「穢れた血の貴女様の存在に怯える我が主が不憫でならないのです」

私は欠陥品なのに。

そんな私をひどく気にするのはきつと本当に国王を愛しているからなのだろう。そこまで考えて、それほどに誰かを愛することができる事をうらやましく思う。

娼館にいた頃の自分を忘れることは一生ない。それが私の血統書だから。

国に国民に認められた地位を持つ、下層から這い上がったニコラウスを尊敬する。だけど、私は私の血筋故にきつと愛せない。

初対面のときに私はニコラウスを下に見て、憤慨していたけれど、本当につりあわないのは私のほう。

「さようなら」

侍女が懐から何かを取り出した。

月光に鈍く光るそれは、おそらく短剣の類。私を殺すためのものだろう。

ふわり、と風が頬をなでる。

その風に乗って、侍女からはあの香水の甘いにおいがしている。

（死んでもいい）

穢れと呼ばれる私を忘れたかったのかもしれない。だから、この婚姻に文句をつけつつも反対しなかったのかも。

（もう少し、ニコラウスと一緒に過ごせるように、私自身も努力すればよかったかも）

つりあわないから愛せない。

そう思ったばかりだったのに。

最期のときに想い、浮かぶ人がニコラウスなのが不思議だった。

11：薔薇の棘、その傷は誰のもの？

「あっ!？」

一向に痛みが来ない。

そう思っただけ目を開けると、誰かの驚きと痛みの混ざった声が聞こえるのは同時だった。

目の前に広い背中。

貴族の正装をして、さっきまで私をエスコートしていた男。その右手には、血のついた剣を持っていた。

「……………あ、っ……………」

ぞわり、と底から這い上がるような恐怖。

広い背中に阻まれて、ニコラウスと向かい合っているだろう侍女の姿は見えない。

生きているのか、死んでいるのか。

知らないうちに、私の呼吸が荒くなって嗚咽のような声が零れて……………。

「大丈夫」

後ろからグイ、と腰を引かれて抱きしめられた。

声はエルヴィン様のもだった。

「だいじょうぶ。……………全く、あれほど一人になるなと言ったのに」

そんな事を言われていた。

忠告とはこの事を指していたの？

は、は、と荒い呼吸を慰めるようにエルヴィン様が私の頭をなでて、髪に唇を寄せた。

「無事でよかった……」

頭をなでる手が私の両目を覆う。

何も見えない、暗闇の中。聞こえるのは背中越しのエルヴィン様の鼓動と呼吸。

そして、鉄のようなにおい。それに混じる、あの濃厚な香水の。

「ぐっ……う……」

ドス、という音と、うめき声。

反射的に肩が跳ねる。

慰めるように腰にまわされた手にぽんと叩かれて。

唐突に光が戻った。

「無事ですか？ 奥さん」

ニコラウスの声だった。

エルヴィン様の手を無理やりはがして、私を覗きこむ男。

その頬に、かすかな紅。剣を握ったままの右手は真っ赤に染まっ  
て、それは肘まで続いていた。豪華な衣装にも。

「……シャルロット」

ボロ、と涙があふれて止まらなくなった。人前で泣いたのなんて覚えていた限りでは初めてよ。

名前を呼ばれた事に嬉しいと思ってしまう反面、ニコラウスがした事が恐ろしかった。ニコラウスの背後で、倒れている侍女が数人の騎士たちによって運ばれていく。

生きているのか、死んでいるのかわからない。

ニコラウスから、まだあの香りがしている気がする。

思考が定まらなくて、身体は恐怖に震えて、気力の限界にきているのかもしれない。

ふらふらな私を支えようと、ニコラウスが手を伸ばす。

その手に息をのむ。

その本当にわずかな私の拒絶を感じ取ったのだろう。ニコラウスも自身の手を見た後、私の顔を見て。

「すみません。……怖がらせてしまいました」

ひどく影のある、哀しい微笑みを見せた。

そして、決して私とは目を合わせず「身なりを正してきます」とすれ違いざまにこぼして通り過ぎた。

ニコラウスの足音が聞こえなくなるまで私はその場にじっとしていた。

今、この庭にいるのは私とエルヴィン様だけ。

今回の主役級の人間がことごとくフロアから消えたのにも関わらず、この庭は至って静かだし、私達を探している様子もない。

「パーティーはどうなってるの？」

「何も心配する必要はありませんよ。それより、何で簡単に諦めた」

死んでもいい、と思ったことを言ってるのね。私は何も抵抗しなかったから。

「安心しろ、ニコラウスは殺してない」

口調が苛立っている。誰がいるかも分からないこの庭で、エルヴィン様が普段の仮面をはがしてしまった。

私の様子に、エルヴィン様は苛立たし気に髪をかきあげて歪んだ笑いを見せた。

「この口調におどろいてんのか？ それだけ俺が不機嫌だって事だよ！ お前、ニコラウスの職業をちゃんと把握してたんだろ？」

ニコラウスは騎士だ。エルヴィン様の信頼厚い。彼の護衛もこなす。

だから、命のやり取りをしたことはきつとこれが初めてではない。頭では分かっていた。ニコラウスはきつと少なからず人を殺したことがあるし、逆に殺されかけた事も多いんだろ？

でも、心がついていかない。

「あいつはお前を護るために剣を抜いた。それをお前は拒絶するのか？ ニコラウスはかなり傷ついただろ？」

だって、初めてだった。

あんなに濁った目をしたニコラウスを見るのは。紅く染まった彼を見るのは。

怖かった。

「言うておくが、お前の知らないところで、お前は多々狙われていたんだ。それをいつも護っていたのはニコラウスだぞ」

あいつは極力お前にそういうくらい部分を見せないようにしてい

ただどな。

ああ、私はとても甘やかされていたのだわ。  
そして、私の心も身体もニコラウスに護られていたんだ。

「とりあえず、客室に戻ろう。大丈夫だ、誰にも会わない」

エルヴィン様とその護衛騎士二人に連れられて、廊下へと戻る。  
ニコラウスのあの微笑みが忘れられない。  
あの瞳が忘れられない。

私を護るために、彼は血に濡れた。

私を護るために。

心が震えた。

(死んでない……良かった)

私なんかのために、その手を汚さなくて良い。

私なんかのせいで、死ぬ必要なんてない。

私には、そんな重荷は背負えないかもしれない。

心が弱っているせいか、ひどく思考も暗かった。

「……真っ青な顔しやがって……ま、しゃーないか。シャワーでも浴びる」

いつの間にか客室についていて、エルヴィン様に風呂に放り込まれた。

『シャルロット』

初めてニコラウスから名前を呼ばれた。

私を護るために紅く染まったその手を、私は拒絶してしまった。

「ニコラウス……」

シャワーの水と音にかき消されながら、私は声を上げて泣いた。



## 12：再戦のゴング

今日がどんなに最悪なモノであろうと、必ず明日はやってくる。  
誰かの世界が終っても、必ず太陽は昇る。  
どんなに明日が来ないでと願っても。

カーテンを引かれる音。 瞼の上から差し込む、少し痛いぐらいの  
日差し。

朝が来た。

昨日は結局、客室に止まってしまった。結婚しているのだから、  
ニコラウスとは同室。だけど、彼は一度も戻ってきていないと思う。

「おはようございます。シャルロット様」

アンリが私を優しく起こしてくれる。昨日、私と一緒にここへき  
て、私と一緒に戻るはずだった彼女も、ここに留まってくれている。  
そのアンリが身支度を整えてくれている間、ぼんやりと昨日の事  
を考えていた。

涙が枯れるまで泣いた目は腫れぼったい。喉はイガイガする気が  
する。

頭が重たい。

ああ、このままもう一度ベッドへ……。

「ちょ、シャルロット様あ、ふらふらと寝台へ行かないでください  
ませー！ これからエルヴィン殿下とニコラウス様と朝食を召し上  
がっていただかなければ……！」

アンナに引つ張られるようにして部屋を出る。  
この子つてば、いつの間にかこんなに大胆になったのかしら。

「今回はエルヴィン殿下の私室にお食事をご用意されているとのことです」

アンナの言葉を聞きながら、廊下を進む。

輿入れのために入国して、ニコラウスと共に屋敷へと行くまでの間、私はここで生活をしていた。けれど、この場所に違和感を感じた。

私の生活の基盤はすでにここではないから。

「シャルロット様、つきましたよ」

内側から扉が開かれ、すでに席についていたエルヴィンとニコラウスが出迎える。

「おはよう、ヴァーグナー夫人」

「おはようございます。エルヴィン様」

真つ先に声をかけてきたエルヴィン様に挨拶を返し、ちらりとニコラウスを見る。

彼はこちらを見て、緩く笑い、けれど声をかけようとはしない。

エルヴィン様と同様に、私を出迎えるために立ちあがったけれど、私の元へまで来てくれたエルヴィン様とは違い、私がテーブルに近づくの待つ。そして、本来なら給仕の者がする、私のために椅子を引く、という行為をして私に席に着くように促した。

……なんか、もやもやするじゃない。

ちょっといつもと違う、その様子に昨日の事が脳裏をよぎった。  
……けどきにしない!!! 私まで樹にしたらなんか收拾がつかないじゃない!!!

「おはようございます、旦那様?」

「おはようございます」

私が席に着く直前、わずかに触れそうになったその手が自然と私を避けた。きつと、私じゃなければ気付かないくらい、自然な動作。そして、いつもだったら最後に俺の奥さんとか、そう言った言葉をつけたニコラウス。そのニコラウスが、おはようございます!!!?!?

……もやもやどころじゃないわ!!! ちょっとむかつくじゃない!!!  
い!!!

かーん。

ええ、開戦のゴング再びよ。

第二ラウンドといこうじゃない!!!

その態度、私が直してやるわ!!!

## 12・再戦のゴング（後書き）

長らくお待たせいたしました。

ようやく続きを更新しました。楽しんでいただけたら良いのですが……。

ちょっとシリアスが続いてて、コメディーに戻したかったのですが、書いても書いてもシリアスになったので……。途中まで書いた12話をまるまるつと書き直してしまいました。

シリアスだとはことん重くなりそうだし、シャルロットにそんなのは似合わねえぜ！！という事でここからシャルロットが頑張りそうな感じです。

そして、12・5話の更新に伴い、タイトルをへんこうしました。すみませんっ！！

## 12・5：再戦のゴング、その直後

「……いやあ、ものすつごくわかりやすかったねえ」

鼻息も荒く、という言葉がぴったりな位の苛立ちを隠そうともしないで朝食を食べ終えたシャルロットは、これまた嵐のように、という言葉がぴったりな様子で去って行きました。はい。

まあ、俺はというと、彼女の食事の様相に完全に呆気にとられてほとんど進んでません。

そんな俺たちを見比べた後、ヘラリ、と笑うようにエルヴィン様がこぼした言葉は今まさに俺自身も考えていた事。

「……こんなに感情を出す方ではなかったはずですが……」

「それはお前がシャルロット嬢を見誤っていた事だよ、ニコ。騎士ならば他者の本質を見極めるくらいは」

「あんたちよつと黙っててください」

ああ、ちよつと面倒ですよエルヴィン様。なんんであんたそんなに出張りたいんですか。

貴方の喋りに付き合っていたら、せつかくの朝食が冷めてしましますよ。

「それにしても、ニコ。お前どうするんだよ？」

「何がですか？」

問われて、食べようとしたパンを置く。エルヴィン様の声が。ふざけた風を装っていても、その中に隠された真剣さに気付いて、姿勢を正す。

「いやあ、あそこまで熱烈な宣戦布告？ 出されたらこちらとしては買っしかないんじゃないでしょーか？ そこんところ騎士としてはいかがなもんです？ ヴァーグナー副隊長」

「どうもしませんよ。私は忙しい身ですから。彼女も、そのうち飽きてくるでしょう」

そうだ、きっと一時の気まぐれです。シャルロットに俺がふさわしくない事は、シャルロット自身が理解しているはず。結婚式からずっと、態度でそれを示してきたのだから。

血筋を重んじるならば、当然ですね。どんなに功績をあげても、貴族の爵位を持っていても、この身に流れている血は偽れないのだから。

シャルロットは、自身の血筋も気にしているようだけれど、実際に国王の実子であるのならば。

やはり、釣り合わないのは俺の方なのでしょう。

「ふうん？ ニコは奥方を愛してない？」

「もちろん、愛情はありますよ。夫婦ですから。……それが恋愛の絡むものではないだけで」

「なら、奥方が王太子と親密なオツキアイをしても、気にしないわけだ？」

親密なオツキアイ、その言い方にちょっと引っかかりを覚えますね。何なんですか。さっきからやけに突っ掛かってきませんか？

「エルヴィン様、貴方が言いたいんですか？」

「……俺は本気だよ？ ニコラウス」

エルヴィン様は笑っていました。

俺は知っているのです。エルヴィン様は仮面を二重にも三重にも

かぶっている事。国民が知っている顔、国王が知っている顔、シャルロットが素だと思っている顔、そのどれもが、エルヴィン様の仮面に過ぎない事を。

彼は、必要ならば、笑顔でその手を血に染め上げる事もできるのです。俺なんて、遠く及ばないほどの高みにいる方だという事を。

そのエルヴィン様が、本気の眼をして笑っています。

椅子を引こうとする給仕を制して、立ちあがったエルヴィン様はそのまま私室の奥へと続く扉へ向かっていきます。

振り返り、囁くように零す言葉は俺に恐れを呼び起こしました。

「なあ、ニコラウス。お前がそうやって逃げるなら、俺が変わりに戦ってやるよ」

だから、さ。

「奥方の心が離れても、後悔するなよ？」

パタン、と扉が閉じて、残されたのは俺一人。

「後悔？ そんなもの、……」

しない、とは言い切れませんでした。

今まで自分で感じていた気持ちとは裏腹に、身体はエルヴィン様の言葉に敏感に反応してしまっていますしね。

歪みそうになる顔を押さえて平静を装い、こぶしを握り締めて、

手のひらの汗をかくし。震えそうになる身体にこわばるくらいの力を込めて。

どっちら俺は、自分の奥さんに恋愛感情があったようです。



12・5：再戦のゴング、その直後（後書き）

ようやくとニコラウスが動き出すかもしれない気配。

エルヴィン様がどんどんおかしな方向に行ってしまったている気がしてしょうがない。もっとへにゃんへにゃんして面白いお方になるはずだったのに……。

### 13：様子見の一撃で瀕死

初めて自分の感情を自覚したらしいニコラウスが悶々としていた頃。

そんな事を知りもしない私はものすごい勢いで用意されている客室に戻り、これまたものすごい勢いで帰り支度を始めた。

部屋の中を掃除していたらしいアンナが呆気にとられた様子で「ど、どうしちゃったんですか!？」とわめいているけれど、気にしないわ。

さっさと屋敷に戻るわよ!!

「そんなすぐには無理ですよ! 馬車を手配しなくてはなりませんから!」

「歩いてでも帰るわ!!」

「距離的に無理です!!」

「私に不可能なんてないのよ! 知らなかったのかしらアンナ?」

鼻息荒く言っただわ。ええ。アンナはとうとういつにない私の剣幕に完全に圧され気味ね。

帰りの支度といっても、持ってきたものはさほど多くもない。

さあ、今すぐ帰りましょう!!

引きとめようとするアンナを引きずって扉を開ければ。

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

扉の前で肩を震わせ、必死で笑いをこらえようとしてみごとに失敗した殿下がいらっしやるのよ。腹立たしい事に。」

「ねえ、さすがに無理があるでしょ？ 馬車なら出してあげるからおとなしく乗って帰ってくださいな」

君たちは招待客なんだからさ。

いいえ、大丈夫です。

……って言ってやりたかったけど。残念ながら私も無理なのはわかってたわ。乗せてくれるんならありがたく乗せてもらいますとも。アンナが不安そうに私をうかがい、そして部屋に戻り、荷物を持ってきた。持てない事は無いけど、少し重たいそれ。二人で分ければ大した事のない重さの荷物。私が手を伸ばそうとするより先に、エルヴィン様がかつさらうかのようにアンナからひったくった。文字通り、ひったくったのよ。そしてさっさと歩きだす。ちよつと待ちなさいよ！

可哀そうにアンナは、「ひゃっ!？」と小さく悲鳴を上げ、その後ぼそぼそと聞こえないくらい小さな声で謝り荷物を取ろうとしている。エルヴィン様は笑いながらひよいひよいよける。

あまり人気のなかった客室の廊下から段々と人が増えてくる。階段を下りて、下へ向かい、正面からではなく、裏の出入り口へ。

そこに、夫であるニコラウスを置いて帰ろうとする、外聞の悪い私の行動を気遣ってくれる細やかさを感じ、いたたまれなくなる。

……なるんだけど。

二人のやり取りが目立ちすぎて。それはもう、困るくらい。廊下をすれ違う侍女や騎士や、その他諸々がそれはもうびっくりして、見なかった事に!!という風情で足早に去っていく。

「……あんまりいじめないであげて頂けます?」

思わず間に入っちゃったわよ。

「面白かったから、つい」

その言葉にアンナは半泣きで、私は呆れかえったわよ。エルヴィン様に至っては本当に面白かったらしく、すごい楽しそうね。

軽々と抱えた荷物を持ち、ひよい、と裏口の扉をあける。すると王宮の、基本的に立ちいる事の出来ない温室のそばにでる。厩舎はここから比較的近いところにあるらしい。

そうして、用意された馬車へと向かう。

「エルヴィン様!!!」

唐突に上から叫ぶような声が響いた。

エルヴィン様はにやりと笑って、目線で私に上を見るように言う。そうして、自身も上を見る。

4階のバルコニーから、身を乗り出すようにして立っているのはニコラウスだった。

「命令を忘れたの？ ニコ、これは決定事項だよ？」

「……本当に私をいじめ倒したいんですね……」

ニコラウスは悔しそうにエルヴィン様を睨んで、そうしてチラリと私を見た。けどすぐに視線をそらして、ふい、と室内へと入っていった。

はい？ 挨拶すらなしですか？ そりゃあ、ニコラウスを置いて帰ろうとはしたけど、さ。

なんだろう、結構傷つきました。不覚にも涙が出そうになって、下をむく。

「馬鹿だなあ、ニコは」

ポン、と頭をなでられて、チラリと目線を上げれば、エルヴィン様が苦笑して私を見ていた。

「馬鹿だなあ、キミも。旦那以外にそんな顔を見せるもんじゃないよ」

あんまり気にしなくてもだいじょーぶだよ。  
そう言っつて、私たちを馬車へと促す。

宣戦布告をしたのは私だけど。  
早くも瀕死なくらいのダメージを負ってしまったわ。  
私、大丈夫かしら？

#### 14・反撃よりもガードで(前書き)

もしかしたらPG・12くらいになってしまつかもしれない……

## 14：反撃よりもガードで

相当ひどい顔をしていたと思う。

エルヴィン様は幾度となく私の顔を見ては、笑いをこらえていたし。アンナなんて、ひどく同情というか、憐憫というか、何とも言えない感情を匂わせながら私を見ていたのよ。……やめて！！私は傷ついてなんていないんだからっ！！……。たぶん。

行きは長く感じた距離も、ぼんやりとしているとあっという間に感情って偉大だわ。

私がぼんやりしている間に、エルヴィン様は御者が扉をあけるのすら待たずに颯爽と降りた。そして実にスマートに私の手を取り、下ろしてくれる。

くるり、と前を見たエルヴィン様は。

「……じゃあ、ボクは帰るよ！」

颯爽と馬車に飛び乗り、文字通りとんぼ返り。

……なんで？

「ええ、ここまでわざわざありがとうございました。そしてもう一度とこちらには来ていただかなくて大丈夫ですよ？」

ポン、と私の肩に誰かの手。

そのままグイ、と身体を後ろに引かれて。踏ん張りがきかなくてそのまま後ろに倒れそうになるのを腰へを回された腕に引き寄せられて、背中に温かな温度。

「……」

後ろを見れないんですけど。

先ほどの声で、私をとらえている人物が誰かはよく分かってい  
るわよ。ええ。すごい勢いで遠ざかっていくエルヴィン様を乗せた  
馬車を見つめる視界の端で、アンナのうっとりとした表情。

そもそも。

「……な、ななっなんで貴方がこちらにつ!?!」

「ずいぶんとつれない事を仰る。貴女の夫が連れ去られた奥さんを  
追いかけて仕事を投げ出したのに」

愛妻家な良い夫でしょう?

耳元で囁くように呟く。

やーめーてーっっ!! 城を出る前のあの冷たい感じはどこへ行  
ったの!?! ってゆうか、追いかけてそのまま追い越して待ち伏せ  
されてるわっ何なのこの状況っ!!!

「お、おおおっおし、お仕事はよろしかったのですかっっ!?!?」

「ああ、エルヴィン様が私を足止めしようと残した仕事なんて。…

…後で本人にやらせれば良いだけですよ」

……。いいのか? いや、いいわけがない。良いわけがないんだ  
けど、相手がエルヴィン様だとなんか良い気がしてきてしまう。

「お帰りなさい、奥さん。先にここに着いてから、貴女が乗る馬車  
が見えるのをずっと待ってた」

「ただいまかえ……」

帰りました、と続けようとして、ふと思いついて言葉を止めた。



背を向けたままだったニコラウスに向き直ると、彼は不思議そうな顔をして私と見ている。

城での冷たい態度といい、今の甘ったるい態度といい、展開が急すぎて私はニコラウスに翻弄されっぱなしだわ。少しくらい、私が反撃しても許される。ねえ、そうでしょう？

「只今帰りましたわ」

小さく呟いて、触れるだけのキスをしようと思ったのだけど。

相手がそれを想定してないから、届かない。ええ、しつかりとした身長差のおかげで。でも、相手に気付かれてしまったら恥ずかしくて、こんな大胆な事出来ない。

というわけで、キスをしようと背伸びをしたまま届いた場所に唇を落とした。

「……ニコラウス様……」

ものすごく近づいた首筋、ごくり、と音がしそくに喉が動いて。チラリと上目づかいで顔を見れば。

「……」

「……」

びっくりした顔がかあ、と紅く染まり、ゆるゆると目を細めて私を見つめ返す。それに引きずられて私まで顔が紅くなり……。

……。ちよつと待て。ここはどこだっけ。とりあえず屋外。外だ。屋敷の門すらくぐってない。そして私はどこにキスをした。喉仏の少し下。……唇に触れるよりも、ちよ、と……。

そこまで考えて、頭から火が出そうになる。

がばつと下を向いたのに、グイと顔をあげられて。

「っうんっ」

食べられるっ！！　ってゆうか、殺されるっ！　息出来ないっ！！  
すっごいキスをされてくらくらしている間に、ニコラウスの顔が  
離れて、そのまま首筋に降りてきた。

舐めるように唇が動き、ちゅ、と音をさせながら徐々に鎖骨の方  
へと降りていく。

そのまま肌を吸われた時に

……

「ぐえっ」

私はヒールで思いっきりニコラウスのつま先をそれはもう渾身の  
力で踏みつけた。

「わっわた、ワタシ、わたし……」

もっいやああああ！！！！

あまりの恥ずかしさに絶叫しながら屋敷の中へ飛び込んだ。  
悶絶しながらうずくまるニコラウスに盛大なエコーを残して。

「……先に仕掛けたのはあなたでしょう、シャルロット……」

邪な欲求や先ほどの攻撃の痛みを引きずったような声の呟きはと  
りあえず私の耳には届かなかった。

反撃、するんじゃないかと思ったかもしれない……。



#### 14・反撃よりもガードで（後書き）

長らくお待たせしました……。

そして展開が急すぎてわたくしもびっくり。

でもニコラウスが動き出してくれたので、そろそろ終盤へ向かいそうです。

## 15：敵前逃亡、だがしかし

風のように屋敷へ入り、使用人たちを驚かせたシャルロットは、そのままの勢いで自室の扉にかじりついた。

「はあ、はあ……っ、も、もういやだあっっ」

恥ずかしい！ 恥ずかしすぎるわ！！ もうこのあたりを出歩けない！！！！

何とか扉をこじ開けて、ベッドにもぐりこんだ。

しばらく誰とも会いたくない！！！！

もう忘れた！！ 何にもなかった！！ 覚えてない！！！！

「……………」

残念ながら、脳みそにこびりついてしまったみたいだわ。さっきから延々と先ほどの痴態？ が脳内でリピートされている。

「いやあああああ！！！！！！」

悶えまくっていた私は気付いてなかった。静かに扉をノックする音、私の名を呼ぶ声、扉をあける音、こっそりとベッドへ近づく足音に！！！！！！

「ぐえっ」

「……………もう猫はかぶらないのですか？」

布団の上からのしかかる重さに思わずつぶれたカエルのような声が漏れた。耳元でクスリと笑う吐息の音が聞こえて、そのまま猫を被らないのか、と。

……。

「えっ！？ な、何の事でしょう！！？」

ガバツと起き上がると、私の上のしかかっていたニコラウスはあっさりとベッドを下りて、ぐしゃぐしゃの頭で呆然と見上げる私を優しい眼をして見つめている。

「いつもわたくし、と言っている貴女が、わたし、と自身を言っていましたね」

「……そ、そうでしたかしら！？」

「貴女はそんな動揺を表には出さない方だったでしょう？ 少なくとも私の前では」

ニコラウスは一度降りたベッドに腰掛け、私の腰を引き寄せた。そのまま私を抱き寄せて、頭に顎を乗せる。その仕草にいつになほどの親密さと、甘さを感じて知らずに身体が震えた。

それをどうとらえたのか、ニコラウスの腕の力がより強まって、ギュツとさらに抱きしめられた。

「結婚してから、まだ日は浅い。十分に新婚と言える時期でしょう？」

た、確かにそうなんです……。展開が速すぎてホントについていけないわ。

そもそも、私たちはお互いに恋愛感情なんて持ってなかった。そ

うよね？ そのはずだわ！！ ニコラウスに全然会えなかったりとか、手紙の中味がそっけなさ過ぎたりとか！ そりゃもう色々不満はあるけど、恋愛とは関係ない！ はず……よね？

「ほとんど一緒に過ごしてはいませんが、貴女は少しずつ変わった。当初の、私を一切近づけないような頑なな態度から、段々と柔らかく。」

「……それは、そうですね。だって、これから一生を共に歩んでいくのですもの」

「そうですね。私もまた、気持ちの変化があつたのです」

ゆっくりと私の髪を撫でる。その仕草に、泣きたくなくなるような何とも言えない気持ちかわいて、胸を締め付ける。

「私は、知っていましたよ」

「何をですか？」

「貴女のお父上が、貴女の祖国が必死で隠してきたであろうもの」

ちよつと待て。少し待っていただけです？　なんか、話の雲行きが怪しくありませんか？？

「貴女の出生の秘密、グレンツィアの穢れと呼ばれている事」





## 15：敵前逃亡、だがしかし（後書き）

はい、ばれてないと思ってましたがすでに知られていました。

最後の絶叫はもちろんシャルロットです。猫なんてとっくに逃げ出してます。もう取り繕う気力はそがれているでしょう 笑

お気に入り登録、評価、ありがとうございます。  
少しずつ少しずつ増えていて、嬉しく思います。  
いつもいつも不定期かつ鈍足更新ですみません。これからもよろしくお願いします。

## 16：リングにタオル

グレンツィアの穢れと呼ばれている事。

ニコラウスの言葉に、顔がこわばるのがわかった。きつと顔色も悪くなっているに違いないわ。

それを感じていながらも、私は表情を取り繕う事が出来ないでいる。ニコラウスの口から出た言葉は私の最大の秘密であり、一生、誰にも知らせるつもりは無かった。……まあ、エルヴィン様にはばれていたんだけど。その時点でいつかニコラウスにも知られる事は予想していたけど、出来るだけ隠しておきたかった。

必要以上に身分にこだわって、祖国の強大さを盾にそれをひけらかし、旦那様であるところのニコラウスを蔑む発言をした。その言葉は常に私自身にも向けられていて。

ニコラウスは私をじっと見つめている。少し困ったように、手を伸ばし、抱き寄せようとしてその手を止めた。

ひどく戸惑ったような顔で、無理やり微笑もうとして失敗したよ。うな、いつものニコラウスなら絶対にしないだろう表情で、そっと息を吐いた。

「すみません、思った以上に貴女にはショックが大きかったですか？」

一度止まった手がゆっくりと私の頬を撫でて、顔にかかる髪を背中へと流す。その仕草はとても大切な宝物を扱うかのようで、落ち着かない気分にさせられる。

「……なんで、知って……」  
「知っていましたよ、初めから」

ニコラウスの声は、泣きそうな子供を慰めるような、甘く優しい色を帯びていた。けれども、その中身は私をさらに打ちのめす様な内容。

「知ってたの？ ……全部？ 初めから？」

「はい、貴女の結婚相手として初めて顔を合わせた時から」

つまり、自分の事を棚に上げた、私のひどい身分差別はまるっと全て知られていた。

さぞ滑稽だった事でしようね。自身もとても褒められた血統でないにも関わらず、他人を蔑む態度は最低以外の何物でもないもの。もちろんそれを自覚していたけれど。

でも、積極的に最低だと思われないわけでもないもの。まして、これから一生を共にする相手なのだから。

「……泣かないで」

そっと抱き寄せられて、背中を撫でられる。

ちよつと、やだ。これじゃあ、本当にただの子供みたい。

きつと顔が赤くなっている。ニコラウスの胸に顔をうずめてそれを隠す。頭の上でクスリと笑う音が聞こえて、私を抱く腕の力が増した。

「……」

「泣かないで、私の奥さん」

恐る恐る、ニコラウスの背に腕をまわした。私の背に回った腕がピクリ、と動いた気がするけれど、勇気のあるうちにしがみつく。たぶん、私からニコラウスに縋りつくのは初めてかもしれない。ひどく恥かしく思うのに、幼子が母に縋る気持ちもわかる気がして

「シャルロット」

「……はい」

名前を呼ばれる。

決して泣いていたわけではないわ。だけど、ちょっと泣きそうだったから、声が震えないように注意しながら返事をした。

「ねえ、シャルロット。私は貴女を愛しているよ」

呼吸が止まるかと思った。

出会ってから初めて向けられた、アイのコトバ。でも、それを完全には信じられない。

それが私の臆病さと卑怯さ。自分がニコラウスにしてきた事のひどさに愛されるはずがないと心が囁く。

「……やめて下さい。愚かなわたくしを愛しているだなんて」

「貴女がそうであったように、私もどこかで、一介の騎士である自分が貴女には釣り合わない。そう卑屈になっていた」

そつと見上げると、ニコラウスの優しい瞳が見下ろしている。耳元にかかる吐息が告げる。

「でも、気付きました。どんな貴女でも愛しています。シャルロット、貴女を愛しています」

決して良い態度を取らなかった私のどこが良かったのか、全然わからない。

わからないけれど、私をまるっと包み込んでくれるこの人に愛されていると安心した。

そうして、泣きそうだった私は本当に泣いてしまった。……不覚にもね。

「わ、……私も、貴方の事を愛し……て……」

私の告白は彼の唇に呑みこまれた。

## 16：リングにタオル（後書き）

ちょっと強引だったかなあ、と思いつつやっと進展しました。

恐らくあと1話か2話で完結となります。

17: はたして勝者は？

とりあえず、こちらに来てから今までの事を申し訳ないとは思っているのよ。

ちよっと自分にコンプレックスがあるからって、それを周りに威張り散らすことで隠してたなんて。正直、とても褒められた事じゃないじゃない？

ニコラウスとも話し合いの末、お互いが思ってる以上にお互いの事を想い合ってるってわかって。

雨降って地固まる、っていうどっかの東国の古いことわざにもあるじゃない。

つまりは、幸せって事よ。

「シャロン」

ニコラウスが私を呼んでるわ。でも、まだ眠いの。ベッドから抜け出せないわ。

私のぐずる様子に、クスリ、と笑う気配がして、ギシリ、とベッドが沈む。

今日はいつもより早く出勤しなくちゃいけないのですって。

お互いの理解を深め合って、ニコラウスが私をシャロン、と呼ぶようになった。私もニコラウスの事をたまぁにニコ、と呼ぶようになって、日は浅い。

のに、ニコラウスは最近泊まり込みの仕事が多いの。エルヴィン様って無粋だと思わない？

「シャロン、私はそろそろ出たいと思います」

「……ううん……いつてらっしゃあい」

「……行つてきます」

ベッドでもぞもぞする私の頬に軽くキスをして、ニコラウスは出ていった。

お見送り、なるべくしたいのだけど。でも、何時ごろ帰るかかわらない（もしくは帰れないかもしれない）旦那様をできれば起きた状態で迎えたいから、ついつい夜更かししちゃうのよ。

そう言ったら、ニコラウスは苦笑して、無理はしないで、と言っていた。

私たちの関係はとても良好。

お互いに隠していた部分をさらけ出せば、気が楽になった。そして、自然でいられる分、二人の間の空気も優しくなるものなのよ。

だけど、ニコラウスの性格ってちよつと詐欺だと思つたわ。

私は実は結構短気だし、すぐ手が出る人間なのよ。なんていうか、面倒くさい女よね。私。

で、ちよつとした事ですぐ手が出ちゃうんだけど、ニコラウスってば笑いながらそれをかわして、私の手を掴んではサラリと恥ずかしい睦言まがいの事を言ってみたりとか、逆に火に油を注ぐような事を言ってみたりとか。

翻弄されっぱなしなのよ！

エルヴィン様が「ニコって呼ぶと嫌そうにするよ」というからそうやって言ってみたら、まるでとろけそうな顔して喜ぶのよ！！

……なんか悔しいじゃない！！

ガバツとベッドから飛び起きて、もうすぐ屋敷を出るだろうニコラウスの元へと走る。

こういう私の淑女らしからぬ行動だつて、屋敷の者たちは悟りきつたような笑いで流してくれる。私の本来の性格がここに馴染んできていくからだわ。（後はここ数日の間に繰り広げられる第三者か



ら見たら甘ったるい二人きりの世界にしか見えないような、本人はケンカだと言いつ張る出来事への耐性がついた結果、というのはニコラウスしか知らなかったりするわけです。）

「ニコっつ！！！」

今まさに扉を開けようとしていたアンバーの手が止まる。

アンバーの横にいたニコラウスもびっくりした顔でこちらを見上げる。

いまだに夜着のまま、階段の上から王者のように指をつきつける私を見て、ユルク笑って「はい、何でしょう？」とのたまった。

このユルク笑いが悔しいのよ！！！！

「いいこと！？ 今はそうやって余裕でいられるでしょうけどね！ 女を磨いてやるわ！！ 貴方の余裕を失くしてやりますからね！！！！」

のちに盛大に語り継がれることになり、後悔する羽目に陥る大胆発言をした私に、ニコラウスは嬉しそうに笑った。

「今でもそんなに余裕なんて無いですよ？」

そういうのを余裕っていうのよ！！！！

「でも、楽しみにしています」

そう言ってニコラウスは仕事に向かった。  
扉を閉めたアンバーが笑う。

「お二人が仲睦まじくて、我々はとてもうれいすよ。頑張って

くださいね。奥さま！」

私も二人の関係がこんな風にまとまるとは思わなかったけれど、  
こういう関係も素敵よね？

でも、絶対に負けないわ！！

## 17：はたして勝者は？（後書き）

これで本編は完結となります。

この後番外編を少し書いていきたいと思っています。

とてももったなく、色々と未熟な点多々ありますが、完結出来て良かったと思っています。

そして、このお話を読んでくださる方、お気に入りに入れて頂いた方、評価をつけて下さった方、全ての方に感謝しています。

ありがとうございます。読者様がいるから、続きを書くことができますと思います。

番外編を更新するまでにまたお時間をいただくかと思いますが、お付き合いいただけたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0726o/>

---

大国の美姫と小国の騎士

2011年10月13日07時34分発行